

「学習のための評価」を軸とした中学校社会科カリキュラムデザイン

岩淵 公輔（府中市立府中第四中学校）

0. はじめに—AI 時代に求められるもの

AI時代の社会では、産業構造が大きく変革することが予想されている。多くの人間に求められるのは、再現性ではなく創造性のある活動である。このような未来社会を想定したとき、学校教育において、創造性のある活動を企図した学びを創り出していく必要がある。AI時代の社会に必要な資質・能力は、多様な価値観をもった他者と創造性のある活動を行うことができることである。この創造性のある活動の前提として、社会科において「相対的未来を考え、より良い社会を創る姿勢」を持つことが必要となると考える。相対的未来とは、過去・現在の社会から考えられる未来のことであり、これを考えていくことが社会科の役割であると考えている。

相対的未来を意識するとこれまでとは見え方が変わってくるものがある。例えば、現在抱えている社会問題について、最近のテクノロジーによって解決されていく可能性を考えることができる。生徒はこれまでの経験からアフリカ＝貧しいという印象を持つが、ケニアなどでは携帯電話とMペサの普及により、貧困問題に対する策が既に取り組みされており、先入観を揺さぶることができる。現在を分析することで、より良い未来の在り方を考えることができる。生徒は最新のテクノロジーに関する知識などを生活経験から学んでいるが、それがこれからの社会とどのように関わるかは、教師の支援がなければ考えることは難しいだろう。

「相対的未来を考え、より良い社会を創る姿勢」を育む授業は、1単元ではなしえない。また、現在の社会問題のみを扱ってもその場の知識のみの対話で表面的なものとなる。つまり、社会科として総合した3年間のカリキュラムデザインで育む必要がある。

I. 問題の所在—静的なカリキュラムから動的なカリキュラムへ

本発表の目的は、パフォーマンス評価を軸とした中学校3年間の社会科カリキュラムデザインの実際を帰納的に分析することを通して、中学校社会科におけるカリキュラムデザインの方法を示すことである。

次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善や単元などのまとまりで学習内容を捉えることが示された。このことは、これまでも言われてきたが、なかなか学校現場では定着していない。その理由として、単元設計の方法がわからないことが挙げられるだろう。また、年間や中学3年間の見通しを一定程度行いながら、カリキュラム設計していても、設計の視点は、教師の感覚（経験知）で行われ、自覚化されていない。学習指導要領が変わっても教師の意識が変わらなければ、また方法論がなければ、授業は変わらない。

カリキュラムデザインにおいて、ゲートキーピングに関する研究が注目される。先行研究では、理論から単元設計をしていく教師の道筋・過程が可視化されているが、生徒の文脈を捉えることや捉え直しから学びを発展させていくことがみえない。文脈の生かし方が、診断的評価として扱われる。しかしながら、単元実施前には、表出しない・読み解けない生活経験等が授業中に表出する場合があります。表出された言動が、その生徒や周りの生徒の学びを深化させる場合がある。深化させられるかどうかは、教師の即興性にかかっている。授業やパフォーマンス中に教師の支援によって、社会科としての学びが深化する。社会科としての学びを保障しながら、生徒の学びを深めるためには、教師のゲートキーパーとしての役割がとても大きい。

教師が、社会科としての学びと生徒の生活経験など様々な文脈をどのように調整しながら授業を設計・実践・再設計するのかを明らかにしていくことが求められる。また、これまでも授業開発・実践に関する分析については、多くの研究がなされてきた。その多くが、分析方法の違いはあるけれども、実践の結果に焦点をあて、分析の位置づけは総括的評価として扱われている。生徒の学びを動的に捉えるためには、形成的評価の分析が必要となってくる。

発表者は、これまでカリキュラムデザインについて3段階の発表を行った。第1は、勤務校が変わるとどのように授業を変えればよいのか、研究者と共同研究した。ここで注目したのが、米国の改訂版 NCSS スタンドのストランドである¹。ストランドの機能として、社会科としての学びを保障すること、根拠に基づいた形成的評価ができること、授業改善を行うツール・社会科として統合するツールとなることを明らかにした。第2は、パフォーマンス評価から構成する単元設計の方法について、逆向き設計論に基づく単元設計の方法を明らかにし、具体的な単元指導計画を示すとともに単元と単元をどのように繋ぐのか、パフォーマンス評価から次単元を設計するカリキュラムの連続性について示した。第3は、教師の支援と応答性の手放し（楠見，2018）のバランスを手掛かりに単元の修正を試み、パフォーマンス評価の方法として、話し合いによる共有化から議論による構造化へ変更することや価値判断を行うことにより、生徒の学びが広がることを示した。また、パフォーマンス課題によって、その後の授業展開が変わることが明らかとなった。すなわち、自分の考えを伝える学習、共に創る学習、社会問題を議論する学習など、単元の目標と生徒の文脈（社会科としての学びも生活経験・学校文化も含めて）に合わせて選択し、カリキュラムを発展させていくことを示した。

これまでの研究の課題として、生徒がメタ認知できる評価を考えることがあげられた。本発表では、生徒が自己評価・相互評価を授業に組み込み、学びを高めていく仕掛けが必要と考え、「学習のための評価」論²を手掛かりに実践を行い、検討していく。

II. 研究対象と研究の方法

研究対象は、発表者が実践した中学校3年間の社会科カリキュラム（主に地理的分野・公民的分野）である。研究の方法は、このカリキュラムの実際を示し、何をどのように変更・修正し、発展させたのか帰納的に分析し、カリキュラムの連続性・段階性を生かした中学校社会科カリキュラムデザインの方法について検討していく。

【註】

1. ストランドは、「より糸」や「要素」とされ、民主的市民育成のために統合されるカリキュラム設計の概念である。
2. 「学習のための評価」論とは、形成的評価論を教師の授業改善の視点のみではなく学習者側の視点から組み直すものである。すなわち、構成主義の学習観にもとづく形成的評価論である。さらに、「学習の自己調整」に加え「学習経験としての意味」を含み、評価を学習と結び付けるものである。

【参考文献】

- ・岩淵公輔 2018「パフォーマンス評価を軸とした中学校社会科単元設計—社会科としての学びと生活経験の結びつきと深化—」日本社会科教育学会第68回全国研究大会自由研究発表資料
- ・楠見友輔 2018「学習者の「媒介された主体性」に基づく教授と授業：社会文化的アプローチの観点から」日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第43巻，pp. 49-59
- ・二宮衆一 2013「イギリスの ARG による「学習のための評価」論の考察」日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第38巻，pp. 97-107
- ・堀田論 2015「教師のゲートキーピングを支援する社会科スタンダードの構成原理—米国における新旧 NCSS カリキュラムスタンダードの機能の原理的転換—」『社会科研究』第82号，pp. 25-36